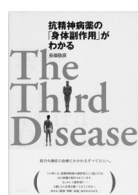


抗精神病薬の「身体副作用」がわかる

The Third Disease



著：長嶺 敬彦

B 5 頁 198 2006 年
定価 2,520 円(本体 2,400 円+税 5%)
[ISBN 978-4-260-00279-0]医学書院刊

内科で9年働いたあと、精神科に異動して10年。すでに身体的な科よりも、精神科領域のほうが長くなっています。精神科というと、「臓器ではなく心を診る科」というイメージが一般的ですが、実際は非常に身体的な科だな、と感じています。

これには2つの意味があって、ひとつは精神疾患そのものが、脳という臓器になんらかの問題が生じている可能性。これは患者さんの理解を浅くする懸念はあるものの、一面では「生い立ち」や「人格」の名の下に人間性を値踏みすることを避けられる利点もあります。医療者自身が患者さんに立ち入りすぎないようにするためにも、こうした身体疾患としてのとらえ方は大事だと思います。

そしてもうひとつは、精神疾患の患者さんの多くが、身体症状を抱えているという事実です。めまいや咽頭の違和感、微熱などなど。自己の存在が不確かになっている状況を象徴するかのようには、身体的な不快感も増しているのです。ときには、治療のために使用する薬剤によって、身体的な不調が増す場合もあります。この本にはその多くの事例が出ています。

長く飲み続けなければならない精神科薬は、他の薬に比べて、特に副作用が強いとは言い切れないでしょう。しかし、持ちこたえる力が弱まっている患者さんにとって、少しの不快症状も薬剤中止の引き金になり得ます。私自身、そうした懸念をしばしば抱きつつ、「口が渇く」「眠くて仕事にならない」といった患者さんの訴えを聞いています。

実際私にできることと言えば、症状を聞くたびに、「状態が良くなれば、少しずつ減らせる場合も多いですし……」。今はもう少しがんばって、飲み続けましょう」と返すことくらい。自分自身がつらいときには飲んでいる薬でも、好調と感じ始めたら、いつ中止してしまうことか。薬を飲み続けてもらうためにも、患者さんの苦痛をきちんと聞いていく必要があると感じています。

この本には精神科薬を飲むことで起こりうる症状が事細かに出ています。医療者のちょっとした注意で改善が期待できるものもあれば、正直言って、どうにもならないと感じるものもあります。

それでもやっぱり、これらの知識は持っておきたい。副作用があるからといって、それをやめられないとしても、私たちが起こりうることを予期し、心づもりしておくことが、患者さんの安心感に必ずやつながることでしょう。

この本は、抗精神病薬の「身体副作用」を「わかる」ための本で、その予防が「できる」ための本ではありません。でも、仮にそれができないとしても、わかることは大事。「そんなこと言われても、処方しないわけにはいかないんだよねあ」「あの患者さんには、薬の減量はまだ無理だなあ」といった、ぼやきが口をつく場合でも、そんなときこそ、是非この本を手に取りましょう。